

聖なる子供

—ルイーザ・アードリックの『ラローズ』における媒介と継承—

余 田 真 也

序

アメリカ先住民オジブウェ族のタートルマウンテン・チペワ・バンドに帰属する現代作家ルイーザ・アードリック (Louise Erdrich, 1954-) の15作目の小説 *LaRose* (2016) は、二つの家族の贖いと癒しの物語からなる。その家族の間で贖いと癒しを媒介するのが、タイトルキャラクターの少年ラローズである。ラローズとは彼の母方のオジブウェ家系のなかで神秘的な才能に恵まれた子供に受け継がれてきた名前で、本作品の現在時に登場する少年ラローズは19世紀半ばの初代ラローズから数えて5人目に当たる。

ノースダコタ州にあるオジブウェの保留地のはずれに暮らす部族民の家族と、160エーカー分の森を挟んだ隣家に暮らす白人の家族は、父親同士が親友で、母親同士が異母姉妹で、子供同士も親交があったが、その関係は1999年の秋の事故を境に激変する。射撃の名手だったラローズの父親が鹿狩りをしているとき、たまたま居合わせた隣家の5歳の息子がその銃弾に倒れてしまうのである。作品の冒頭に置かれたその場面が続いて、最愛の息子をとつぜん失ってしまった両親の悲嘆、不運にも隣家の息子の命を奪ってしまった男とその妻の苦悩が濃厚に立ちこめる。罪悪感に苛まれる男は、妻とともにサンダンスの儀式を行い、岩壁で断食を行い、スウェットロッジの儀式を行い、その過程で得た幻聴や幻影の示唆を受けとめ、部族の昔の慣習にならって、亡くなった子供の代償として同い年の息子ラローズを隣家に託す決断をする。以降はラローズが5歳から9歳になる5年間のうち、1999年から2000年の2年間と2002年から2003年の2年間を物語上の現在として、二つの家族や関係者の物語が複層的に展開する。加えて19世紀中期に遡る初代ラローズにまつわる物語や、ラローズの父のインディアン学校時代の物語 (1967年から70年) が挿入されている。

アードリックに二度目の全米批評家協会賞の栄誉をもたらしたこの小説は、全米図書賞に輝いた前作 *The Round House* (2012) とともに、正義がいかに達成されるのかという問題を扱っている。⁽¹⁾ 司法の限界のために正当な裁きを受け

ないレイプ殺人事件の容疑者を、被害者の13歳の息子が秘密裏に裁くという『ラウンド・ハウス』の物語は、人種がらみの邪悪な犯罪に対する正義のありようを大胆に問いかけていた。他方『ラローズ』の場合は、善意の人間が図らずも犯した不運な罪をめぐる贖いや癒しに焦点がある。ただ、これら二作品は、どちらも正義を成就する役割が先住民の子供に課されている点が興味ぶかい。

自身4人の娘の母親でもあるアードリックは、それ以前の作品でも子供を主人公に設定したり、子供に主要な役割を担わせたりしている。そのもっとも顕著な例は、全米図書賞児童文学部門の最終候補となった *The Birchbark House* (1999) を筆頭とする「バーチパーク連作」だろう。『樺の樹皮の家』は、特別な能力を備えた7歳の少女 Omakayas を主人公として、19世紀中期のオジブウェの伝統的な生活様式や、天然痘の猛威にさらされる集落を描いているが、アードリックが「謝辞」で述べているように、この作品は彼女の母 Rita と妹 Lisa とともに行った家族史の調査結果を物語化したものである。以後書き継がれる連作は、オマーカヤスと彼女の子供を軸に19世紀中期のオジブウェ一家の軌跡をたどる。

バーチパーク連作も特別な才能を持つオジブウェの子供を主人公に据えているが、彼女たちは伝統的な生活を営む19世紀半ばの部族民である。本稿では、小説『ラローズ』に焦点化して、21世紀の現代を生きるオジブウェの子供が物語上の最も重要な役割を担っていることに注目したい。以下、複雑に織りあげられた本作品の物語を解きほぐしながら、部族の昔の慣行がもたらす贖いと癒しの効果や、二つの家族を媒介するラローズの影響力を検証し、さらにラローズの系譜を遡って文化の継承者としてのラローズの潜在力を測定しつつ、作者アードリックが本作品に込めた思いを明らかにしたい。

1. 罪の贖い、喪失の癒し

隣家の息子 Dusty の死後、加害者の Landreaux Iron とその妻 Emmaline Peace は、被害者の両親 (Peter Ravich と Nola Peace) とともに顔をあわせることはできなかったが、事故からしばらく経ったある日、ラローズを同伴してラヴィッチ家を訪れる。ランドローは玄関口で “Our son will be your son now” と告げ、“It’s the old way” とだけ付け加えてスーツケースとともに我が子を預けるのである (LaRose 16)。ピーターはかつての友人の信じがたい言葉に異議をとねえようとするが、ダスティの玩具で遊んでいたラローズに魅了されていたノーラは、ランドローの言葉を聞いて表情が柔和になり、ラローズに対するすさまじい欲

望を示していた——“All the softness was flowing out. And the greed, too, a desperate grasping that leaned her windingly toward the child” (16)。

ラローズを受け入れた当初、被害者であるラヴィッチ一家の感情は当然ながら複雑であり、彼らの関係はごちないものだった。ノーラにとってラローズは「慰めになる (“comforting”)」と同時に「不安にさせる (“unnerving”)」存在であり (17)、ピーターはラローズに関心を抱きながらも、亡くなった息子に対する不実の感覚に悩まされる——“he was pierced with a sense of disloyalty” (17)。その後も彼らがダスティを忘れることはないが、アイアン夫妻の自己犠牲的な償いは功を奏し、ラヴィッチ一家が抱えていた理不尽な喪失感とは、“this unspeakable gift” (17) によって少しずつ癒されていく。⁽²⁾

家事と園芸が得意な美人の専業主婦ノーラは、ランドローの妻エマリンとは異母姉妹だが、彼女自身は非先住民で、姉との仲も悪く、さらに 10 歳の長女 Maggie とも折り合いが悪い。それゆえに、ダスティの代償としてのラローズに過剰なほどの愛情を注ぎ、息子に差し入れしようとするエマリンを無視して彼を独占しようとする。反抗期の娘マギーは、初日の就寝時に涙を流すラローズに対して意地の悪いふるまいも見せたが、即座に彼を包み込み、彼を抱いて眠る。母親への反抗をエスカレートさせる彼女は、ラローズに対してはその裏返しのような愛情を注ぐ。ラヴィッチ家の主ピーターはロシア＝ドイツ系の白人で、材木を商い、コンビニ・チェーン店での副業の収入で農業を維持している。亡くなった息子の敵をとる代わりに薪の山をランドローに見立てて割り続けたり、Y2K のもたらす混乱に備えたりして平安を保とうとしていたが、彼もまたラローズを愛するようになり、なにより彼が妻や娘の “help” (76) になっていることに感謝していた。

他方、ラローズを放出した家族は、それぞれが喪失感に苛まれていた。保留地内の新しいインディアン学校で管理職を務めていたエマリンは、ある日、食料品店でピーターに同伴していたラローズと出会い、つかのまの再会に心を躍らせ、スキンシップを図り、会話に興じるが、別れ際には言葉を詰まらせる。日ごとにラローズに思いを馳せる彼女は、自分たちが選択した贖いの行為について自問自答を繰り返している——“Many times each day, she questioned what they had done” (35)。数ヶ月間、彼女はラローズのために、料理を作り、キルトを作り、モカシン靴を作り、それらをラヴィッチ家に届けたが、いずれもノーラが阻止してラローズの手には渡らない (54-55)。帰宅後エマリンは娘たちの前でノーラを毒づき、彼女の性格の悪さは、カルト・リーダーだった夫を殺して罪を逃れた母親 Marn に由来すると主張する (55-56)。

ラローズには4人の兄姉がいて、いずれも保留地の学校に通っていた。バレーボールに熱中している二人の姉 Snow（8年生）と Josette（7年生）は、他の兄弟（Hollis と Willard/Coochy）とともにクリスマス・ツリーを飾り付けているときに、とつぜん泣きだしてしまう。両親からラローズの処遇に関する説明を聞いて以来、毎週のように同じようなことが起こっていたという——“This exact thing had happened every week or so since Landreaux and Emmaline had explained to the other children what they had done” (47)。

ランドロー自身もラローズをラヴィッチ家に預けることで己の罪を贖い、事故以来の極度の抑鬱状態から抜けだして、仕事に精をだして平穏を取り戻そうとしているものの、他の家族の喪失感や自身の喪失感を受け止めきれないでいる。メディスンマンの友人 Randall を訪れ、スウェットロッジで祈りを捧げ、熱い蒸気と薬草の芳香で身を清め、彼に取り憑いている「悪魔」を取り除いてもらおうとする。ランダルはメディスンマンの長老たちが昔の知恵を受けついで奇跡を行ってきたこと、ラローズにもそういう才能があること、ランドローが被害者に対して行った措置は正しく、そのうち家族からも理解が得られること、彼自身の痛みのために嘆かないことなどを説くが、ランドローは家族から恨まれているという思いを断てず、彼の心に平穏は訪れない——“Still, even after being poached like a frog by Randall, there was no peace. Landreaux felt worse and worse” (54)。

ランドローは、アルコール依存症のために育児ができなかった両親の代わりに祖父母の元で育てられ、インディアン学校時代には親友だった Romeo に肢体不自由が残る大怪我を負わせて恨みを買ひ、湾岸戦争に出征して酒や薬物の依存者となった。しかし部族の伝統的な儀式とカトリック神父の断酒会によって立ち直り、ロミオの息子を養子として引き取り、エマリンとの間に恵まれた4人の子供とともにまっとうに育て、理学療法士助手および介護助手としてキャリアを積み、保留地の病院や患者からの信頼も得ていた。そうした矢先の不運な事故であった。しかも彼がもっとも得意とする射撃の誤射である。トラヴィス神父（Father Travis）がいみじくも述べるように、懸命に努力していても、最悪の事態に見舞われる人もいるのである——“some people would try their best but the worst would still happen” (8)。

ラヴィッチ家の一員となったラローズは、その理由こそ理解できていなかったが、健気に己の役割を全うしようと努めていた。最初の数週間、少なくとも養母のノーラの前では泣くのを我慢しており、ノーラの要求に応じて初日から彼女を“Mother”と呼び、ダスティが好きだった本（*Where the Wild Things Are*）

を何度も読み聞かせてもらう。最初のクリスマスを迎える前に、エマリンが手料理をもってラヴィッチ家を訪問してきたときにも、ノーラは応答せずに読み聞かせを続けたが、ラローズは彼女に逆らわず、ただ押し寄せる哀しみに包まれていた——“A fuzzy wash of draining sadness covered him” (55)。町の食料品店で実母エマリンと再会したときも、別れ際に涙をこらえ、実の両親にも心配をかけないように気丈に振る舞っていた。

ラローズは5、6歳の子供とは思えないほど辛抱よく人の話に耳を傾け、自己犠牲を払いながら人を癒す力を備えているが、まだ幼いので当然ながら大人の配慮を必要としている。ランドローは、彼らが採用した伝統的な部族の方法には理があるものの、己の罪の重さから逃れるために子供を利用しているようにも感じており、さらに部族の伝統は必ずしも現代に通用しないのではないかという疑念も抱いていた (75)。またピーターは息子の代わりに一緒に暮らすラローズの孤独な哀しみに心を痛めており、しばらくして両家で彼を育てることをランドローに提案する——“We have to think of him [LaRose]. We should share him. We should, you know, make things easier between us all” (76)。その後、ラローズは春から夏にかけて実家で過ごすことになる。

ラローズを共有するという取り決めは、実家の家族にとっては想定外の朗報だった。事件後に新しい職場（親の都合で家庭生活が乱れた先住民の子供のための保留地内寄宿学校）で管理職に就いていたエマリンは、慣れない職務に私生活が浸食されていたと同時に、ラローズの不在の影響で仕事を滞らせがちだったのだが、ラローズが戻ってくると状況は一変し、職場では生き生きと余裕のある仕事ぶりを見せるようになる (106-07)。一方、ラローズを両家で共有することをピーターから伝えられたノーラはラローズがアイアン家に戻ってしまう可能性や、自分が狂気に陥る可能性にひとり怯えており、トラヴィス神父に相談を始めるとともに、自殺を選択肢に加えるようになる。そのような状況下で二つの家庭を行き来するようになるラローズは、さらに重要な役割を果たしていく。

2. ラローズの介入

不運な事故からほぼ1年後の9月、ラローズはラヴィッチ家に戻り、プルート (Pluto) という架空の町にあるマギーと同じ学校にバスで通う。ラローズが属していたクラスには、図体の大きな年長の少年 Dougie Veddar がいて、ラローズはしばしば彼にいじめられていた。ある日、教室でラローズから鉛筆を

借りようとして断られたダギーは、尖った鉛筆を奪いとり、それをラローズの腕に突き刺すと、折れた芯が皮膚の下に残ってしまう。帰宅後にマギーに腕を見せると、彼女は怒りを露わにする——“Her face swelled up. Her lips tightened. Her golden eyes went black” (122)。まもなくマギーは友人と組んで、ダギーをひどく懲らしめてラローズの仇を討ち、捨て台詞を決める——“Don’t touch my brother, she said in that scary-nice way she had, her eyes turning gold with satisfaction. Please?” (123)。その夜、ラローズの部屋に忍び込んだマギーは、彼の腕に残った鉛筆の芯が入れ墨のように見えたので、自分で鉛筆を刺してラローズと同じように芯を腕に残す。後日、マギーは父親とアイアン家を訪問したときに、スノウとジョゼットに皮膚に食い込んだ鉛筆の芯を見せながら、姉弟の証しだと語る——“we stabbed ourselves to be brother and sister” (131)。

しかしマギーの報復はさらなる報復を招く。ダギーには中学生の兄 Tyler がおり、他の3人の仲間 (Curtains Peace, Brad Morrissey, Jason “Buggy” Wildstrand) とともに、“the Fearsome Four” を自称していた。学校からの帰宅時にバスではなく母の迎えを待っていたある日、タイラーに騙されたマギーが彼の自宅のガレージまでついて行くと、待ち構えていた輩が彼女に襲いかかる。男子4人に押さえつけられて諦めそうになるものの、気力を振り絞って抵抗し、タイラーの指に噛みつき、バギーの股間を蹴り、カーテンズの目を抉り、ブラッドの顔をギターで打ち付けて、なんとか逃げおおせる。しかし彼女はそのトラウマ的な体験を誰にも話せず、ただ待ち合わせに遅れてきた母親ノーラに対しては反抗的な態度をエスカレートさせる。その一方で彼女はラローズには安らぎを感じていた。ラローズの足元に犬が身を投げだす様子を観察するマギーには、彼がまるでローブをはおった修道僧のように映る。彼は蜘蛛を捕まえても決してつぶさないし、蟻を水攻めにしたりしない。屠殺前の鶏を落ち着かせ、傷ついた蝙蝠を助ける心優しい少年なのである (137)。マギーは仮定の話として、男子が彼女に襲いかかってきたらどうするかとラローズに尋ねる。ラローズがそいつらには死んでもらうと応じると、「聖人 (“saint”)」でも愛のためなら殺せるのかとマギーが問う (140)。自分を聖人だと思わないラローズは返答に窮するが、「傷ついた動物 (“broken animal”)」であるマギーにとって、ラローズは傷を癒やしてくれる「聖人」なのである (140)。それから2年がすぎても、眠りに就くときに彼のことを考えると、心が落ち着くのである——“Falling asleep, Maggie thinks about LaRose. . . . He calms her down. He is her special, her treasure” (268)。

事故から一周忌の朝、ランドローはベッドから起き上がれない。発熱してい

ることがわかるが、エマリンは彼の憂鬱に巻き込まれることを避けて、ラローズを学校に送るように頼んで仕事にでかけてしまう。しかしランドローはそれまで秘密にしていたことを誰かに打ち明けたかった。事故当日、彼が狙っていた鹿はただの獲物ではなく、別世界につながる存在で、彼に何かを伝えようとしていると感じていたのである。

He would have known the animal was trying to tell him something of the gravest importance. The deer was no ordinary creature, but a bridge to another world. A place where Landreaux would never stop seeing his friend's son in the leaves, never stop strange thoughts from visiting at the most inopportune moments. (149)

その日に受けた薬物検査の結果は陰性だったが、検査した警官のザック・ピースがランドローの様子をどことなくおかしいと感じていたのは、そのせいなのだ。誰にも打ち明けられそうにないと思ひかけていたが、彼の枕元に来て心配するラローズに、事故の日は自分の頭がどうかしており、狙いがずれたのだと告げる。しかし、ラローズは夢を通して知ったことを父親に話す。ダスティは犬の後をつけて森に入り、そして木の枝から落ちてきた、さらにランドローが彼を撃ったのは偶然だとダスティ本人から聞いたという (151)。ランドローは自分が口にできなかったことをラローズが知っており、秘密を共有しえたことに驚くとともに、またしても「ラローズ」に救われたと安堵する。

ランドローが初めて「ラローズ」に救われたのは、フォート・トッテン (Fort Totten) のインディアン学校に入学した9歳のときのことである。⁽³⁾ 他の先住民の子供たちと一緒にバスで目的地に向かっていた彼は、休憩所でランチを食べ終えて、バスに戻って座席の下に座っていると、上から見えにくい場所に、「ラローズ」という署名を見つけて感銘を受ける。それから先、彼はバスの中だけでなく学校に着いてからもずっと目を覚まさなかったという——“He did not wake when the bus stopped. . . . Not even in bed that night, the next morning either, did he wake. He never woke up. He was still sleeping on that bus” (152)。その署名はエマリンの母 Mrs. Peace (4代目ラローズ) が、彼女の母 (3代目ラローズ) に語っていたものと符号する。彼女は同じインディアン学校に在籍している間に、あちこちに LaRose という名前を残したという。

We left our name in those schools and others, all the way back to the first school, Carlisle. For the history of LaRose is tied up in those schools. Yes, we wrote our

name in places it would never be found until the building itself was torn down or burned so that all the sorrows and strivings those walls held went up in flames, and the smoke drifted home. (134)

ミセス・ピースが子供時代に残した名前は、世代を超えてランドローの目にとまり、彼を魅了し、一種の催眠状態に誘った。つまり意識はされていないが、ランドローにもラローズに通じる神秘的な感受性が備わっていたようだ。

アイアン家と共同でラローズを育てることになり、自殺を人生の選択肢に加えるようになって以来、ノーラは台所にあった緑色の椅子を納屋に持ち込んで、ときおりシミュレーションしていたが、なかなか実行には移せない。むしろランドローを殺害するほうが、心が解放されるのではないかと想像する。それを実行すれば、家族からは称賛されるだろうが、ラローズの理解は得られないだろうと考える。ラローズを愛している限り、彼の実父を傷つけられないという意味では、昔ながらの先住民のやり方は効果的だった——“[T]heir tradition worked. Dazzling act” (112)。それでも、ラローズを共有することを知った日に、頭のねじが切れたように、古くなったケーキをロウソクごと貪り食べてから、彼女の生活は奇妙なほど静謐になってもいた——“After she ate the cake that time, everything was still. The evening was deep and pure” (126)。彼女は、たとえば死者の世界から生者の世界を見ると、ある種の安らぎが感じられ、また自分が棺桶にいることを想像すると気が鎮まるようになっていたのである (126)。

ダスティの死から3年目を迎えた2002年の夏の終わり、13歳のマギーはたまたま納屋でロープを首に掛けて椅子の上に立つ母親を目撃する。それは彼女が人知れず何年も行っていた自殺未遂だったが、マギーは強烈な衝撃を受ける。それからしばらく、娘は母に会うたびに気分が悪くなり、二人は抱き合って涙を流すのである——“Mother, daughter. They fell into each other's arms like terrified creatures. They clung together like children in the panic cellar” (223)。また彼女は母の監視をラローズに依頼するとともに、自殺を防ぐ方法を相談する。熟慮の結果、ラローズは秘密裏に自殺の道具となりそうな物品を取り除き始める。家中の医薬品や刃物を隠し、紐類や薬剤を捨て、さらにピーターの銃のコレクションから装填された銃弾を抜いてしまうのである。一方、マギーは母に対する反抗的な言動を慎むようになり、またノーラは娘の衝撃を和らげるような心遣いを示すようになり、二人の関係も徐々に修復されていくのである。

ラローズ8歳(2002年)の秋、エマリンはもはや両家の間で息子を共有していることにさえ我慢がならず、息子を取り戻して保留地の学校に登録すると

電話でピーターに宣言する。彼女の独断によってラローズは実家から保留地内の学校に通い始めるが、ある日のこと、母の車のなかで彼がラヴィッチ家に戻らない理由を問う。エマリンは彼を他人の家に預けておくのは寂しすぎるので、家族と一緒にいてほしいのだと答えるが、ラローズはノーラへの配慮やマギーとの親密な関係性に訴えて、ダスティが死亡したときの約束どおりにラヴィッチ家との往復を続けることを望む。

You just pass me around, he said. I'm okay with it, but it gets old. Problem is, Nola, she's gonna be too sad. It might be death if she gets too sad, Maggie told me. Plus Maggie and me, we're like this. He put two fingers together, the way Josette did. (247)

ラローズは大人の都合で自分が交互に受け渡されていることは許容するが、ラヴィッチ家との約束を取り消すには時間が経ちすぎていることを母に認めさせようとする——“[I]t's too late to go back on your promise” (247)。ラローズの念頭にはノーラの自殺願望があったわけだが、母は息子がずいぶん大人になったことを認めざるを得ず、しぶしぶながら彼を両家で共有する形に戻す。

当のノーラはピーターの副業の店で働き始めて間もない頃に、ラローズがダスティの霊と一緒に玩具で遊んでいる声を聞き、自殺の選択肢を放棄する。いつもは閉じてある部屋の扉が開いていたので、部屋の外でずっと聞いているうちに、彼女はすっかり心の平安を取り戻すのである——“Nola sank silently down against the wall beside the open door. Her face was peaceful, her eyes downcast; her lips moved slightly as if she was repeating a name or prayer” (271)。その翌日、彼女は古木や紙ゴミを燃やししながら、緑の椅子も炎のなかに投じる——“That's all over, she said out loud” (272)。ダスティを思って彼女が一人で泣いていたころにはどんな薬も効かなかったが、代替としてのラローズに癒やされ、そして救われたのである。

ラローズが保留地の学校に通うことになると、マギーも同じ学校に転校したいと言いだす。ラローズにとって姉姉と同じ学校が安心だったように、マギーにとってもアイアン家の子供たちとの関係の強化は心強かった。特にスノウとジョゼットは文武両道の優等生で、半従姉妹 (half cousin) という関係を越えた本当の姉妹のような間柄だった。両親は娘が先住民の学校に転校することには難色を示していたが、ダスティの死後、彼女が初めて本気で望んだことなので許可せざるを得なかった。実際、転校は彼女にとって大いにプラスに働いた。

かつてプルトの学校での教師との面談では、両親はどの教師からも試験の成績は完璧だが素行が悪いという娘の評価を聞かされていた (298)。しかし転校後のマギーはスノウやジョゼットとともにバレーボールに夢中になっており、初心者で体格に恵まれないにもかかわらず、努力を惜しまず家でも練習に励んでいた。学業でも関心の持てる教科の教員には一目置かれており、学校の面談では自然科学の教師から最高の生徒だと告げられて感動する——“You must be very proud of your daughter” (300)。

その週末にノーラとマギーは、ポップコーンを手に次々と 1980 年代の映画を観ながら話していた。ピーターが帰宅すると、ソファの上で枕に身体を沈めてマギーが眠っており、ノーラは映像を見ながらその隣で微笑みを浮かべていた。彼はその情景を薄気味悪いと感じたが、やがてそれがごく普通の家庭の姿なのだと思い直し、自分の家族が良好な関係にあることを理解する——“I feel weird because it's all so normal. I'm the odd man out, the only one who cannot understand that we are now going to be all right” (302)。またマギーの出場したバレーボールの試合では、ノーラが興奮のあまり本性むきだしの声援を送って、娘と夫を驚かせる——“Kill! She screamed into a spot of silence. Kill! Kill! Kill!” (308)。試合を観戦していた選手の家族や友人たちはみんなパイプ椅子に腰かけていたが、ノーラだけが立ちあがって応援していたので、後ろの女性と喧嘩になり、二組の夫婦はつかみ合いの喧嘩のすえに退場させられる (308-09)。この一件もまたラヴィッチ家の絆の回復を示す出来事である。

ラヴィッチ家に比べてアイアン家の場合は、夫婦関係がごちないままである。ランドローは事故以来、エマリンから愛情が得られなくなっていることに苦しんでいた。かつて依存症患者だった彼を辛抱強く支えて克服へと導いてくれた妻に救いを求めていたのだが、今回は安易に癒しを求めないことも彼なりの贖罪だった。ランドローはエマリンの愛に頼らず、ランダル友人からパイプストーンを入手し、ラローズのためにパイプを作りながら、酒や薬物の力を借りたいという欲望に負けそうになると、石の力を借りて気を鎮めるのだった——“He put the stone to his forehead until he felt safe. He took a deep breath. That erratic thing in him had settled down” (256)。他方、ラローズを独占することに失敗したエマリンは仕事に没頭していたが、彼女への好意を告白したトラヴィス神父の転勤前に、一夜限りの情事に慰めを求める (319-20)。

ラローズが独断で行ったノーラの自殺防止策は、ラヴィッチ家の日常生活を少し不便にただけでなく、想定外の効果をもたらす。インディアン学校時代にランドローの親友だったロミオは、両親を探すという目的で学校から逃亡し

たランドローにつきあってミネアポリスまで辿りついたものの、不運な事故で彼だけが怪我をして肢体不自由の身となり、しかも幼い頃からずっと好意を抱いていたエマリンも奪われていた。現在は不本意な仕事に甘んじながら、ランドローへの恨みを募らせ、報復となる情報の収集に勤しんでいた。そしてついに誤射の事故にまつわる情報の入手に成功し、家族の団欒を楽しむピーターにランドローの不実を伝える。ロミオは不正に入手したダスティの死亡報告書から、彼の死因が被弾ではなく、木から落下したときの怪我による出血だったことを知り、銃弾に倒れたという思い込みからランドローが止血を怠ったために失血死したのだと結論づけ、しかも事故当日にランドローは抗精神薬の影響下にあったという虚偽情報も盛るのである。ピーターは愚かにもロミオの罠にかかってランドローへの恨みを再燃させ、彼を射殺するために冬の狩場に車で連れだす。一方のランドローは相手の意図を察知して喜びすら感じる。

A giddy ease steals into him. That all of this will soon be over. Peter is a good shot. It will be like vanishing. No more hiding his miserable truth. No struggle with the substance or not the substance. No waiting for Emmaline to love him again. (327-28)

事故から3年以上が過ぎても、抵抗せずに死を待つほどにランドローは憔悴していたのである。しかし幸いにもラローズがピーターの銃の弾をすべて抜いていたので新たな殺人は回避された。ピーターが覚悟を決めて引き金を引いても銃弾は発射されず、ランドローは被弾を待ちながら雪のなかをただ歩き続け、そのまま徒歩で帰宅するのである。

ここまで検証してきたように、ラローズは5歳から9歳の子供としては現実味がないほどに献身的で善良である。Ron Charles の書評によれば、彼はアードリックの作品のなかでももっとも品格のある人物で、「先代のラローズたちの癒し力を最も純粋に蒸留した趣（“the purest distillation of his foremothers' healing ability”）」がある。しかし『ラローズ』における何人かの登場人物に対しては、人物造形が不十分で印象が希薄だという批判や、性格がよすぎて現実味に乏しいという批判もある（Gordon）。「聖人のようなラローズ」は現実味に乏しい事例の筆頭に挙げられようが、ラローズはどこにでも存在するような子供ではなく、生まれながらに特別な能力を持つ少年で、「世界の橋渡し」（Yvonne）の役割や、「アンバサダー」（McBrath）の役割を担っているの、いくらか現実味に欠けるくらいの方がむしろ適切ではないだろうか。

ただし、ラローズは理想化されすぎているわけでも、超人的に有能なわけでもない。たとえば、老齢の部族民が語る伝統的な物語を聞いている間に、疑問に感じたことを語り手にしつこく尋ねるが、それは部族民として不適切な振る舞いなので窘められる。またマギーへの暴行に対する報復をひとりで決意し、4人組のたむろするガレージを探しだし、トラヴィス神父の元で修練を重ねたテコンドーを武器に、単身で乗り込む。しかし8歳の少年と高校生4人とは勝負にもならず、ラローズはあっさり倒されてしまう。ブルートの学校の面談で、教員がピーターとノーラに告げたように、ラローズは学業に秀でた生徒ではないし、恥ずかしがり屋で、夢見がちなのところもあるが、勤勉で、物静かで、親切で、礼儀をわきまえ、穏やかで、愛想がよく、成熟した少年なのである——“Maybe not an A student, but a worker, quiet, and so kind. Respectful, easygoing, pleasant, a little shy. . . . Dreamy sometimes. And accomplished!” (298)。

随所に普通の子供らしさを残してはいるものの、媒介者としてのラローズは父の罪を贖うために犠牲を払い、被害者の家族の喪失感を癒すばかりか家族関係の修復に寄与し、さらに二つの家族の関係修復を促進する役割を果たしている。養母ノーラの自殺を防止するために講じた措置が、別の犯罪の阻止につながったことは、単に都合のよい偶然というよりも、誰からも愛される聖性を備えたラローズが及ぼす超自然的な影響力の徴候とみるべきではなからうか。

3. ラローズの系譜

本作品には5人のラローズが登場する。主人公の少年は5代目ラローズで、彼の母方の祖母ミセス・ピースが4代目ラローズ、彼女から一代ずつ遡り、彼女の曾祖母に当たる Mirage が初代ラローズである。4代目までのラローズは、いずれも共通する能力を備えていた。つまり、部族社会での教育の結果、植物に精通しており、空を飛ぶことができた。また学校教育の結果、オジブウェ語に加えて英語を使い、四則演算もできた——“All of them learned two languages, four levels of math, the uses of plants, and to fly above the earth” (202)。5代目ラローズはまだオジブウェ語の流暢な使い手ではなく、植物にも精通していないが、初代ラローズの子孫にふさわしい神秘的な力に恵まれている。

ラローズは二つの家族を媒介し、彼らに癒しをもたらし過程で、日常世界と心霊世界を媒介する霊能者のような力を発揮していた。たとえば、ランドローとの秘密の対話のなかで、夢を通じて事故現場でのダスティの様子を知っていたように、彼には凡人には見えないものを見る力や、死者や精霊と交信する力

がある。その最も濃密な顕現は、ダスティが亡くなった現場で、誰にも内緒で一夜を明かしたときの神秘体験だろう。事故からほぼ3年後の夏のある日、週末をラヴィッチ家で過ごすエマリンに嘘をついて、事故現場に赴き、毛布に横たわり、鳥や虫の鳴き声や、暗闇で動物が動きまわる音を聞きながら眠りに落ちる。明け方に目を醒ますと、喉の渇きと空腹に悩まされるが、その場に横たわる心地よさに浸り続け、暑さが増す頃に誰かが近づいてくるのを感じる。それは20人ほどの年齢もさまざまな一団で、その半分はインディアン、残りの半分は青白く光り輝いていてはっきり見えなかった。彼らはラローズの周りに座ってくつろいでいたが、彼には気づかずに彼のことを話題にし始める。そのなかの一人が気づき、みんなが彼を見て、成長した子供の存在に気づいた親戚のような反応を見せる。するとオジブウェ語を話す老齢の女性と彼女に瓜二つの年輩の女性が話しており、老齢の女性がラローズに向かって“*You'll fly like me*” (211) と告げる。さらに母エマリンにも似たもう一人の女性が彼にやさしく話しかけ、“*We'll teach you when the time comes*” (211) と告げる。ラローズは「強烈な安心感 (“[i]ntense comfort”）」 (211) に満たされ、後に彼女たちを「霊的な援助者 (“spiritual helpers”）」 (227) と呼ぶようになる。その幻影の一団のなかにはダスティもいたので、言葉を交わしてしばらく遊び、それから彼らが歩み去っていくのを見届ける。これはラローズが周囲の親族や年長者ばかりか、先祖にもしっかり見守られていることを示す逸話である。

その後、先祖の話していたラローズの飛翔力が思わぬ形で開花する。マギーの無念を晴らすべく「恐るべき4人組」に飛びかかり、バギーに床にたたきつけられた拍子に呼吸が止まり、初めての空中浮遊を体験するのである。空中に浮かび上がって自分の姿を見下ろし、4人組のうち信仰心のあるブラッドが心配そうにのぞき込んでいる光景を目にする。空中を漂いながら見ていると、体が息を吸い込むうちに、見ている自分も吸い込まれて息を吹き返す。

LaRose hovers, watching to see if he'll take a breath. Freedom, buoyancy, repose. Oh yes, and take that breath before Brad gives him mouth-to-mouth. As soon as he fills his lungs, LaRose is sucked back into his body with a gentle thhhhhpppp. (290)

ラローズたちには「空を飛ぶ特殊な才能 (“a tendency to fly above the earth”）」 (291)があった。太鼓の音にあわせて正しい歌が歌われれば何時間でも飛べた。現在ではそうした歌は半ば失われているが、太鼓の音が消え去ることはない

——“Those songs are now waiting in the leaves, half lost, but the drumming of the water drum will never be lost” (291)。この空を飛ぶ力は、初代ラローズの両親に由来するというが(291)、自由に空を飛べたその女性はいったいどんな人物だったのか。

初代ラローズの母 Mink は強力な癒し手でもあった「神秘的で暴力的な (“mysterious and violent”)」家族の一員で、有力な毛皮商 Shingobii の娘だった(12)。彼女の夫 Mashkiig が、彼女の顔を傷つけ、弟たちを刺し殺すまでは、見た目も美しかったという。1839 年のこと、ミンクは当時 11 歳の娘ミラージュ(初代ラローズ)を、交易所の白人経営者 Mackinnon に売りつけようとしていた。マッキノンは店先で延々と叫び続けるミンクを相手にしなかったが、翌日になっても叫び続けるミンクに根負けするように少女を引き取る(13)。マッキノンは商人としては正直かつ公正で、道徳的な墮落の徴候もなかったので、交易所の店員 Wolfred Roberts からすれば意外な対応だったが、少女を奴隷の運命から救ったのだと解釈する(19)。ウォルフレッドはニューハンプシャー州ポーツマス出身の読書好きの白人青年で、家事を含む雑事全般を担当していたので、少女の面倒もみることになる。初日に食事を与えたあと、顔の汚れを拭き取ってやると、この上なく美しい顔が現れて当惑し、マッキノンに気づかれないように再び泥を顔に塗り直す(20)。彼は少女に雑用を手伝わせ、パン作りを教え、文字を教えた。彼が仕留めた獲物をさばいて調理する一方で、少女は肉料理に使えるベリー類の収穫や、沼地の草から茶を作る方法など植物に関する知識を教えた。さらに彼女は自分を買戻す金を貯めるために罌を仕掛けにいくようになり、またマッキノンに美貌を見られないように自分で顔を汚していた(57)。

そんなある日、少女の父マシュキークが娘を取り戻しに交易所を訪れる。マッキノンが彼の要望を断ると、一週間後にマシュキークは娘を売った妻ミンクを殺害したという。そのことを聞いた少女は、うつむいて泣くばかりだった(98)。さらにウォルフレッドは少女がマッキノンに犯されたことに気づくと、真剣に二人の未来を考え始める。少女と二人で逃げてもマッキノンが追跡してくるだろうし、マシュキークが雇われるかもしれない。もはや彼を殺害するしか選択肢はないが、その方法が難しい。熟考の末に、もっともリスクの少ない方法として、植物に精通した少女に有毒植物を入手してもらうことを思いつく。その意思を彼女に伝え、彼女はウォルフレッドに従えて森で数種の有毒植物を採取し(118)、それをマッキノンの夕飯に混ぜる。夜中になって彼がひどく苦しみ始めると、二人は身支度を整え、弱々しく彼らと呼ばい止めるマッキノンを

屍目に逃亡を実行する。

その後、彼らは後を追ってくるマッキノンの亡霊と “My children! Why are you leaving me?” という声から逃げて、原生自然のなかを転々と移動し続けたが、やがて飢えと寒さで憔悴し、小さな樹皮の小屋を作ったところでウォルフレッドは力尽きて倒れてしまう。少女は彼を看病しながらどこからか太鼓を手に入れてくる。彼女の母の太鼓の音は、人を生き返らせることができるのだ——“It [the drum] flew to me, she told him. This drum belonged to my mother. With this drum, she brought people to life” (143)。少女が太鼓を叩いて歌を歌うと、ウォルフレッドはリラックスして眠り始める——“The drum corrected some interior rhythm; a delicious relaxation painted his thoughts, and he slept” (144)。落ち着きを取り戻した彼は、自分の身体から抜け出して、少女と一緒に空高く飛び、徒歩二日分の距離に集落を見つける。

Her song lulled and relaxed him so that when he stepped out of his body, grasping her hand, he was not afraid to lift off the ground. They traveled into vast air. Over the dense woods, they flew so fast no cold could reach them. Below, fires burned, a village only two days' walk from their hut. (144)

二人は深い森から出てオジブウェの集落にたどり着き、宣教師の家で水と粥を恵んでもらい、暖かい部屋の床で毛布をかけて眠る。翌朝ウォルフレッドが少女に大人になったら結婚しようと言うと彼女は微笑んで頷く。ただ、彼が名前を尋ねてみても、彼女は本名（ミラージュ）を教えずに、代わりに花の絵を描くのである——“She laughed, not wanting him to own her, and drew a flower” (145)。宿を提供してくれた宣教師は、後にミシガン州になるテリトリー内に作られた長老派の新しい寄宿学校に若いオジブウェたちを送り込んでいた。少女も教育を受けなければそこに入れるが、彼女には家族がいないので、修了後に年季奉公をすることになると言われる。彼女はその条件の意味を理解できなかったが、学校への入学に同意する。

インディアン学校で白人になる教育を受けるにあたって、ミラージュは母の太鼓を含む部族的なものをすべて奪われる。彼女は身も心もアニシナベでありインディアンだったので、学校のベルの音を聞くと頭痛や思考の混乱に悩まされ、弱気になったり疲れたりするとウォルフレッドからの手紙を何度も読みかえしていた。ベルの音には慣れなかったが、生徒の入れ替わりの激しさにも、周囲の生徒が病気で命を落とすことにも慣れていく。彼女自身が熱を出して死

ぬかと思ったときには、青白い精霊が枕元に現れて、魂を体に戻して生きるように彼女に告げたという（146）。

一方、ウォルフレッドはオジブウェの集落を離れて交易所を引き継ぐことになる。マッキノンについては、彼が突然の病気に罹ったので、少女と二人で助けを呼びに来たと説明したところ、救出に向かった先住民は、野犬に食いちぎられたバラバラの死体を見つけたただだった。交易所を営みながら、彼はしばしばミシガンの少女に手紙を書いた——「ぼくのフラワー、親愛なるラローズ（*My Frower, Chère LaRose*）」（147）。彼はボージャー（植民地時代の毛皮狩猟人）に連なるフランス人やメティスの子孫と知り合い、その言葉の影響を受けていた。つまり、ミラージュが本名の代わりに教えた“the flower”のフランス語表現が、ラローズという名前の由来なのである。

ボージャーの子孫たちは少女のことを諦めるようウォルフレッドを諭しており、彼も他の女性に全く縁がないわけではなかったが、結婚せずに少女を待ち続けた。彼は少女と同じ部族民と長期にわたって生活をともにし、狩りをし、話をし、儀式を経験していた。マッキノンの亡霊を追ひ払うために治療を受けてその効果も実感していた。「少女が白人に変わっていく間に、ウォルフレッドは先住民に変わっていた（“He was turning into an Indian while she was turning into a white woman”）」（147）のである。

学校を修了し、さらに3年の奉公を経て、ラローズ／ミラージュはセント・アンソニー（現ミネソタ州南部の町）で6年ぶりにウォルフレッドと再会する。二人は大平原の交易中心地だったペンビーナ（現ノースダコタ州北東部カナダ国境の町）のさらに先に進み、ウォルフレッドが手に入れた農地へと向かう。彼はそこに21世紀まで受け継がれる小屋を作り、ラローズは再び自由に飛翔するようになる。（その付近一帯はやがてタートル・マウンテン保留地になる。）二人の間には4人の子供が生まれ、子供たちはラローズから英語の読み書きと、英語とオジブウェ語の会話を習う。しかし末娘のラローズが一歳の年に、母ラローズ／ミラージュは学校時代に感染していた結核に倒れる。快復、二度目の発症と快復を経て、十数年後の三度目の発症時には自力での快復は難しく、最後はセントポールの病院で先進治療を受ける。その間、ウォルフレッドはエイムズ医師（Dr. Haniford Ames）からの知らせを受けながらノースダコタの家で子供たちの面倒をみていたが、マッキノンの頭部が現れたという手紙をラローズから受けとり、彼女の元に急ぐ。道中、ウォルフレッドは彼の元に飛翔してきた彼女の重みを感じながら、彼女の魂が体にとどまってくれるよう祈っていたが、病院の待合室で看護師からラローズが絶命したと聞かされる。彼女が体

から離脱している間にマッキノンの亡霊がラローズの命を奪ったのである——
“She broke out of her body and spun up through the rushing air, just as Mackinnon sank his pig tusks into her heart” (196)。

ウォルフレッドは遺体を引き取って自宅付近に埋葬するつもりだったが、不可解なことに彼女の遺体が行方不明になっていた。その後、ウォルフレッドや子孫のラローズたちは遺体／遺骨の返還を求め続けてきたが、現在もまだ戻っていない。ウォルフレッドの保管文書に残るエイムズ医師の返信によれば、彼女の遺骨は研究に役に立つので返せないという。その後、医師の遺言により、ラローズの遺骨は他の遺骨とともにエイムズ郡歴史協会に寄贈され、一時は展示されていた。返還請求に対しては、先住民の遺骨はエイムズ郡の歴史の重要な一部だという理由で協会は返還には応じなかった。その後はなぜか行方がわからなくなっている (202)。

2代目ラローズは初代ラローズの末娘で、母親が亡くなるまでに、覚えるべきことはすべて教わっていた。オジブウェの生活術はもとより、睡眠中に身体から抜けだして空から地上の様子を調べる方法や、夢の世界での処方 (“how to dream, how to return from a dream, change the dream, or stay in the dream”) も学んでいた (199)。彼女は母のようになりたくて、母が体験したような寄宿学校を体験するために (198)、かの Richard Henry Pratt のリクルートを受けて、ペンシルヴェニア州のカーライル寄宿学校に入学する。学校では白人の教えを吸収することに没頭し、プラットの自慢の生徒になった。修了後は父ウォルフレッドと暮らし、教師になり、いとこと結婚して子宝にも恵まれたが、母と同様に結核への感染を隠し続け、その病魔に命を奪われる。彼女の娘が3代目ラローズだが、彼女についてはミセス・ピースを訪問する母親として登場する以外にほとんど描かれていない。

4代目ラローズであるミセス・ピースは、フォート・トッテン・インディアン学校の元教師という設定で、本作品のランドローとロミオを含む多くの生徒たちから慕われていた。アーチェリーに秀でたランドロー、暗算に秀でたロミオはともに校内で有名な生徒で、ミセス・ピースは何度も彼らを自宅に招いていた。(とりわけロミオは幼い娘だったエマリンを気に入っており、よく絵本の読み聞かせをしていた。) 退職後はエマリンとともに保留地に戻り、母方の家系が受け継いできた家で10年暮らした。その家のもっとも古い建物は初代ラローズが家族とともに暮らしていた小屋で、幾度かの増改築を経て、現在のアイアン家の家屋になっている。その10年の間にエマリンはランドローと結婚し、ロミオの息子 Hollis を養子として引き取り、4人の子供を授かり、子供

たちの手がかからなくなった頃に、ミセス・ピースは高齢者用住宅（Elder's Lodge）に転居して、さまざまな病と闘っていた。ただ元夫の Billy Peace が死亡した後は、不思議と痛みが和らいだという（24）。視力も衰えているものの、趣味のビーズ刺繍を続け、彼女を訪れる子供や孫に編み物を教えている。部屋に集まる人たちに揚げパンやケーキをふるまい、誰からも愛されている。

初代ラローズから4代目ラローズまでの系譜の素描から明らかなのは、彼女たちがインディアン学校の教育を受けてもなおオジブウェの文化伝統の担い手であり、その継承者として、とりわけ次代のラローズの教育を通じて、文化伝統を後世に伝えていることである。また初代ラローズのように、部族民ではない人物を部族の文化伝統へと導いたり、2代目から4代目のように、インディアン学校の教師という仕事を通じて、後の世代に文化伝統への橋渡しをしたりしていた。初代ラローズ／ミラージュの直系の子孫にあたるエマリンの家には、最初に建てられた小屋に加えて、ウォルフレッドが鍵を入れるために使っていた“no-handle sugar bowl”（262）が逸話とともに受け継がれている。またウォルフレッドが保管していた古い手紙や遺骨返還関係の書類はミセス・ピースに引き継がれており、彼女がそれにまつわる物語を娘や孫たちに語り聞かせている。

部族の文化や歴史の伝達は、必ずしも旧世代から新世代への一子相伝ではないが、5代目ラローズの場合は特にその傾向が顕著である。母親に連れられて祖母ミセス・ピースを訪れたときに、多くの高齢者が彼に注目していたが、たとえば Sam Eagleboy という入居者は、早速ラローズにオジブウェ語を教え、精霊に関する知識を授けていた（109）。それ以降、彼は祖母を訪問するたびに、言葉や物語や思想を学んでいくことが示唆されている。ラローズにとっては、精霊の言葉を聞き取るためにもオジブウェ語の習得が必要なのだが、彼の父母は流暢な使い手ではない。しかし少なくともエルダーズ・ロッジには彼の師範となる母語話者がいるのである。

2002年の秋、ラローズは死期の迫った老婦人 Ignatia からオジブウェの創世物語を聞く。それは彼女が子供の頃に聞いていてとつぜん思い出したという物語である。昔、夫婦と子供二人の家族がいて、妻が大蛇と浮気をしていることを知った夫は、妻を外出させている間に蛇を殺し、家に持ち帰った肉を切り刻んでスープにして妻に食べさせる。妻はスープに満足したが、それが彼女の浮気相手だと聞かされると、真偽を確かめるために蛇の住んでいた木に走って行く。その間に夫は子供たちを地下に隠し、戻ってきた妻の首を切り落とし、空に舞い上がって逃げる。しばらくして妻の頭部が目を開け、子供の行方を探る。小屋にあった石が秘密を漏らし、しかも子供たちに四つの力（川と火と山と茨

の森を作る力)を与えたことを教えると、頭は転がって子供たちを追いかけて始める——“*My children, wait for me! You are making me cry by leaving me!*” (292)。⁽⁴⁾ 二人の子供は追いつかれそうになりながらも何とか逃げ延びて、兄はやがて Wishketchahk や Nanabozho といった名前でも知られる存在になって最初の人間であるアニシナベ (オジブウェ) の人々を作りだし、弟は狼になって兄に付きそうのである。

イグナーシャが語り終えたときに、その物語のモラルを尋ねるラローズに対して、彼女はオジブウェの物語にモラルなどないと鼻であしらうが、転がる頭を恐れるラローズに対しては、「これは追われることについての物語 (“*It is about getting chased*”)」だと答えて説明を続ける (294)。オジブウェは追われてこの世界にくるのだが、キリスト教徒がいうように悪魔や原罪に追われるのではなく、降りかかってきたこと (つまりトラウマ) に追われるのであり、他人になしたことや、他人がなすことに追われ、つねに後ろを振り返り、次に何が来るのかを心配するのだと言い添える (294)。口承の物語には教訓などよりももっと根源的な人間の条件や世界の実体が映しだされており、それを解釈することに意義がある。イグナーシャはそのことを伝えるかのように先のような意味深長な言葉を発した直後、“*Oops, it's gone!*” と驚きの声を何度か発しながら息をひきとる (294)。

傍らにいた友人の Malvern は片手を取り、もう片手をラローズに取らせ、いつか彼の仕事になるから台詞を覚えておくように告げて、イグナーシャに死後の道案内をする——“*Malvern talked to Ignatia, telling her the directions, how to take the first steps, how to look to the west, where to find the road, and not to bother taking anyone along*” (294)。イグナーシャの手は冷たくなっていたが、ラローズは室内に彼女の存在を感じとっていた——“*There were so many sensations in his body that he couldn't feel them all at once, and each, as soon as he felt it, slipped away into the past*” (295)。

このように、ラローズは部族の高齢者たちからもオジブウェの文化伝統を受け継ぎながら、霊能の感度や精度を高めている。イグナーシャが昔の物語を話す前に、ラローズの様子を観察していたマルヴァーンは、彼の出自の良さを賞賛し (“*He's made of good ingredients*” [263])、それはエマリンが不義を働いたからかもしれないと示唆してミセス・ピースにたしなめられる。口の悪いマルヴァーンの発言は単に意地悪だけではなく、ランドローの両親が依存症で、彼自身も戦争から生還した後は依存症に苦しんでいたことを示唆していたかもしれない。ダスティを殺害して以来、彼は贖罪意識に苛まれ、いつ酒や薬に頼

り始めても不思議ではない。ただし、ランドローがラローズの父にそぐわないのだとすれば、エマリンも同様である。エマリンは学業成績優秀で、キリスト教の信仰にも部族の信仰にも篤く、熱心な学校教師だが、霊能者ではなく、部族の文化伝統にもそれほど信をおいていないようである。自分の思いを優先して一方的にラローズをラヴィッチ家から取り戻そうとした結果、ラローズ本人からたしなめられたりもする。しかも彼女の父ピリー・ピースは何度も結婚をくりかえしており、妻ミセス・ピースに精神的・身体的な負担をかけ、最後の妻に殺されてしまう人物である。エマリンが5代目ラローズでない理由は明記されていないが、そうした事情と関係があったのかもしれない。

過去150年ほどの間にエマリンの家系には一世代に一人のラローズがいた。エマリンの母と祖母はラローズと名づけられたが、どこかで二つの家系に分かれてしまい、その二つの世代には他にもラローズがいてそれぞれが親戚関係にあり、「エマリンの母も祖母もその物語や史実を知っていた（“They both knew the stories, the histories”）」という（11）。ミセス・ピースが娘をラローズと名づけなかったのは、家系の事情に起因していたのかもしれないが、それを知る手がかりは本作品には記されていない。そうした文脈があるにも拘わらず、ランドローとエマリンの子供はラローズと名づけられた。いやむしろ彼らは「無垢にして強力で、家族の癒し手に属していた名前（“a name both innocent and powerful, and had belonged to the family’s healers”）」（11）を自分たちの子供につけないつもりだったが、最後の子供はラローズという名前を持って生まれてきたかのようだったという——“They had decided not to use it [the name], but it was as though LaRose had come into the world with that name”（11）。ラローズという名前は、過去と現在、異界と斯界といった異なる時空を行き来する神秘的な力を持ち、文化の橋渡しに貢献し、周囲の誰からも愛される異能の徴なのである。

アードリックは本作品の「謝辞」において、彼女の母方の祖父の大おばが“original LaRose”だと述べており、またアードリックの長女 Persia がオジブウェ語を教えている相手を“a new generation of LaRoses”と表記している（373）。さらに Claire Hoffman によるインタビューでは、ラローズについて書きたいという思いは10年以上前から抱いていたが、実際に取り組むまでは、祖先にラローズという名前の人物がいたことさえ忘れており、さらにそのラローズについても生きていた年代ぐらしかわかっていないと語っている（Hoffman）。アードリックにとって、ラローズの系譜にまつわる物語を紡ぎだすことは、自身の血筋の不明な部分を補うことに等しい営みでもあったのだろう。

跋

アードリックは本作品において、少年の不運な事故死をひとつの契機として、人の心の傷や人間関係の軋みを多彩に浮かび上がらせるが、ラローズの介入を経て、喪失は癒され、不和は修復され、罪悪は回避され、正義が成就し、調和が支配する。たとえば、マギーに対する集団暴行の一件は、ラローズによる報復の失敗を経由して、アイアン家の兄弟姉妹や、マギーのボーイフレンド Waylon の知るところとなり、ホリスとウィラード（クーチャー）とウェイロンが、恐るべき4人組（特にバギー）に制裁を加える準備をする。しかしバギーは自分の妹に手を出そうとして両親から家を追い出されており、すでに制裁を科された状態だった。一行は荒れ果てたゴミ屋敷で、汚物にまみれて惨めな姿をさらす半狂乱のバギーを見届ける。

本作品の登場人物のなかでひとときわ異彩を放つ脇役ロミオは、ランドローに対する復讐の機会を虎視眈々とうかがう卑劣な人物だが、息子のホリスはアイアン夫妻の元で健全な若者に育っていた。高校卒業後には州軍に入隊して災害時に人を助け、地域の生活の維持に貢献したいと考えている。それに比べてロミオは過去の不運や現在の不幸を他人に転嫁し、それを何度も息子に聞かせるような哀れな男である。バーでコーヒーをすすってBBC ニュースを見ながら神父と時局を論じることが唯一の楽しみで、ランドローを陥れるための情報を求めてあちこちに出没し、エルダーズ・ロッジではかつての恩師ミセス・ピースには関わりを避けられ、他の年輩の女性たちにはからかわれている。彼は入居者から痛み止めの薬を盗んで自宅で試すが、効き目があまりに強くて下痢と勃起を繰り返すありさまである。またホリスが成人を迎えた日にたまたま酒場で出会い、彼から祝いのビールをねだられても支払えず、逆に息子に奢ってもらうという情けなさである。ホリスにとっては尊敬しがたい実父であるが、アードリックはこのロミオにも癒しの機会を用意している。

『ラローズ』の最終章は、ホリスの高校卒業および州軍入隊を祝うパーティーの準備から当日までを描く。パーティ当日、ラローズは鷲の羽根をつけ、鮑の貝殻を持って、テーブルにおかれた料理や列席している長老たちにセージを焚いた煙を振りかけ、食べ物或少しずつ皿にとって樺の木の下に置き、ダスティや祖先の霊を招く（367-68）。

そのパーティにホリスの実父として招待されていたロミオは、高齢者たちの席に座っていたが、食事の後のケーキの時間に、ホリスに誘われて会場の最前列まで歩き、彼の隣に立つ。ホリスの名誉を讃えるランドローの歌が会場全体

を魅了したあと、彼に促されてロミオはスピーチを行う。ランドローとエマリン、そしてミセス・ピースがホリスを立派に育ててくれたことに謝意を表し、こつこつ蓄えた預金口座の小切手帳をホリスに渡して大学進学を勧める。抱き合う父子に注がれる聴衆の惜しみない拍手に感極まり、ロミオはそれまで堅く口を閉ざしてきた秘密、ホリスの母親の素性（元ストリッパー）を明かす（370）。

続いて鷺の羽根をもってサンダンスを踊ったサムが、羽根をホリスに飾りつけ、オジブウェ語で祈りを捧げる。ラローズは先祖の霊が森の中から漂い出てきて、自分の背後で共感や好奇心を示していることを感じとる。遅れて会場に着いたランダルは、ランドローとともに前に進み出て、ホリスの人生を讃える歌を披露する。誰もが幸福感に包まれていた会場で、未来ある二人の男女（ホリスとジョゼット）がさりげない会話を交わす場面で作品は終わる。

Anyway, said Josette, edging around the table, still holding her cake spatula.
You can quit the National Guard now, right?

No way, he said, surprised. I signed the papers.

Oh, Hollis.

Josette was staring straight ahead, standing next to him, and her voice was the voice of a woman. (372)

Indian Country Today における次のような賛辞は、もっとも適切な『ラローズ』評の一つといえるだろう。

For healing, one can only hope there will always be a LaRose. For stories of experiences universal to all and unique to Indian country, one can be satisfied that for this generation, there is a Louise Erdrich. (Lemay)

ラローズのような癒しを与えてくれる人は、だれのそばにもいるとは限らないが、万人に共通する経験と先住民に固有の経験を備えた物語で満足感を得たければ、アードリックの作品を読めば良いのである。一般に部族の文化や伝統や歴史や物語は大人から子供へと継承されていくものだが、アードリックは伝える役割を担う大人よりも受け継ぐ役割を担う子供に焦点を当てている。そして媒介者としてのラローズを軸に、悲哀や憤怒に満ちた人生が愛情で潤い、悪意や欺瞞に歪んだ世界が正義で満ちる可能性を描いている。ラローズの血脈を自覚し、4人の娘の母でもあるアードリックだからこそ、これほどまでに子供の

聖性に信頼を寄せ、愛情と正義にあふれる作品を創りだしたのである。

[付記] 本研究は JSPS 科研費 (16K02511) の助成を受けたものである。

註

- (1) この二冊の小説は、ピューリッツァー賞フィクション部門の最終候補となった *The Plague of Doves* (2008) とあわせて、“Justice Trilogy” と称されている。
- (2) このように本作品には、部族社会の伝統的な方法が今日のアメリカ社会でもある程度は通用するということが示されているのだが、この点に関しては、加害者が自分の子供を被害者の家族に贈るという方法は 21 世紀には現実味がなく、しかも亡くなった子供は先住民でもない、といった指摘もある (Gordon)。しかし Claire Kirch が述べるように、アードリックの『ラローズ』執筆動機の一部は、「西洋的な正義のシステム」(有罪か無罪を判定し、処罰の仕方を判断するという仕組み) の欠陥への関心にある。つまりアードリックは法体系の外側でしか正義が成就しえない状況が現代にも存在することを承知しており、『ラローズ』でもそのような正義のありようを探求しているである (Kirch)。
- (3) フォート・トッテンは、ノースダコタ州北東部の Devils Lake (Spirit Lake) 南岸に位置し、1867 年から 1890 年まで合衆国軍の砦だった。1891 年にインディアン総務局の所有地になると、1935 年までは連邦のインディアン寄宿学校として再利用され、デビルズ・レイク (スピリット・レイク) 保留地、フォート・バートホルド保留地、スタンディング・ロック保留地、タートルマウンテン保留地から、スー族やオジブウェ族の生徒が集められた。1935 年から 39 年までは政府の結核予防所となり、その後 1959 年までは主に近隣のスー族の子弟が通う学校になった。1960 年以降はノースダコタ州の史跡となり、現在は敷地内にインディアン学校の教室、学生寮、共用施設、教師や軍人の住居などが再現され、一般公開されている。アードリックの小説では、4 代目ラローズ (ミセス・ピース) が学び、教員として勤め、さらにランドローとロミオが学んだという設定になっているが、彼女たちの接点となった 1967 年から 70 年には、すでに寄宿学校でも通学学校でもなかった。
- (4) 二人組が切り落とされた頭に追いかけるという場面は、初代ラローズとウォルフレッドが毒殺したマッキノンの霊に追いかける場面や、イ

ンディアン学校から逃亡したランドローとロミオが、逃亡の先々で学校の教師（Bowl Head という渾名の Mrs. Vrilych）を見かけて怯える場面にも反響している。

引証・参考資料

Beidler, Peter G. and Gay Barton, *A Reader's Guide to the Novels of Louise Erdrich*. Revised and expanded ed., U of Missouri P, 2006.

Charles, Ron. "Louise Erdrich's *LaRose*: A Gun Accident Sets off a Masterly Tale of Grief and Love." *Washington Post*, 9 May, 2016, www.washingtonpost.com/entertainment/books/louise-erdrichs-larose-a-gun-accident-sets-off-a-masterly-tale-of-grief-and-love/2016/05/09/e719aa04-1215-11e6-8967-7ac733c56f12_story.html.

Erdrich, Louise. *The Birchbark House*. Hyperion, 1999.

_____. *LaRose*. 2016. Harper Perennial, 2017.

_____. *The Round House*. 2012. Harper Perennial, 2013.

Gordon, Mary. "*LaRose* by Louise Erdrich." *New York Times Book Review*, 16 May, 2016, www.nytimes.com/2016/05/22/books/review/larose-by-louise-erdrich.htm.

Hoffman, Claire. "Interview with Louise Erdrich." *Goodreads*, May, 2016, www.goodreads.com/interviews/show/1124.Louise_Erdrich.

Johnson, Carla K. "In *LaRose*, Louise Erdrich Looks at Atonement" *AP News*, 9 May, 2016, www.apnews.com/266219f29a4044b884a097545da1290d.

Kirch, Claire. "A Child for a Child." *Publisher's Weekly*, 9 May, 2016, www.publishersweekly.com/pw/by-topic/authors/profiles/article/69967-a-child-for-a-child-louise-erdrich.html.

Kurup, Seema. *Understanding Louise Erdrich*. U of South Carolina P, 2016.

Lemay, Konnie. "Louise Erdrich's *LaRose*: Two Families Bound by Death, Love and Healing." *Indian Country Today*, 12 May, 2016, newsmaven.io/indiancountrytoday/archive/louise-erdrich-s-larose-two-families-bound-by-death-love-and-healing-rjc1WNEgUillW3kkDfefQ/.

McGrath, Charles. "Louise Erdrich on Her New Novel, *LaRose*, and the Psychic Territory of Native Americans." *New York Times*, 6 May, 2016, www.nytimes.com/2016/05/07/books/louise-erdrich-on-her-new-novel-larose-and-the-psychic-territory-of-native-americans.html.

Yvonne, Zipp. "*LaRose* Is Louise Erdrich's Beautiful New Novel of Love, Atonement, Justice." *Christian Science Monitor*, 23 May, 2016, www.csmonitor.com/Books/Book-reviews/2016/0523/LaRose-is-Louise-Erdrich-s-beautiful-new-novel-of-love-atonement-justice.